十九編下

十九編上
什題曲亭馬琴
錦昇堂板

十九編上
錦昇堂板

何者の元祢歌あるゝ「女兒ハ伊勢や源氏ハ毒と薬ぞ徒然草ハ生そ一藥ゝとも
勢語ハ業平朝臣と齋宮密通の段等有源氏ハ藤壺女三宮等の不貞を記ぞ
是を元ゝハせードと云べ其ハ醜を挙美を掬て我國乃至宝あるべしと一条の禪閤
等の称揚ありし紫文を誹ず深意ありて男一代を准へたるいせ譚の隠微を知ら
ぬ不隨て貶めるハ撤屁の偏見なり二大奇書と共並べ論ぬ復ゞ岡の放言ぞル
摘出たるこそ拙く色淫猥の章を嫌ひ鶉奔狐綏の篇なども詩経ハ云ふ削ら
ぬ春秋左傳ハ君を弑する條の多きを何とゝ云ふ悪を記せい懲さんが爲あり又良人乃
過あるハ月日に蝕の有がごし瑕を厭て王を拖たゞ酸將酒を緒留よゝの先師ルそれ
義ハ承知なゞ云せ物ハ云ふも口開きて少ク名人の力を竭しく染筆あるとハ云ふ
あき一粒選の紫鹿子に汗を緻きど及びもつかぬ由縁ル既柏木ありいろ花ル
ルみぢ ル昔とあり枯葉のかゝ〳〵なるのみ其ゝ賞しれさ再ル絶ぬれバ
其色香を浅果ぬれぢいそゞ六日の柏餅販出ール緩こがちなれど舊來不弃
のお茶ゞを力ハ年々數篇を調ぎるゝ為ぬ

万延辛酉孟春

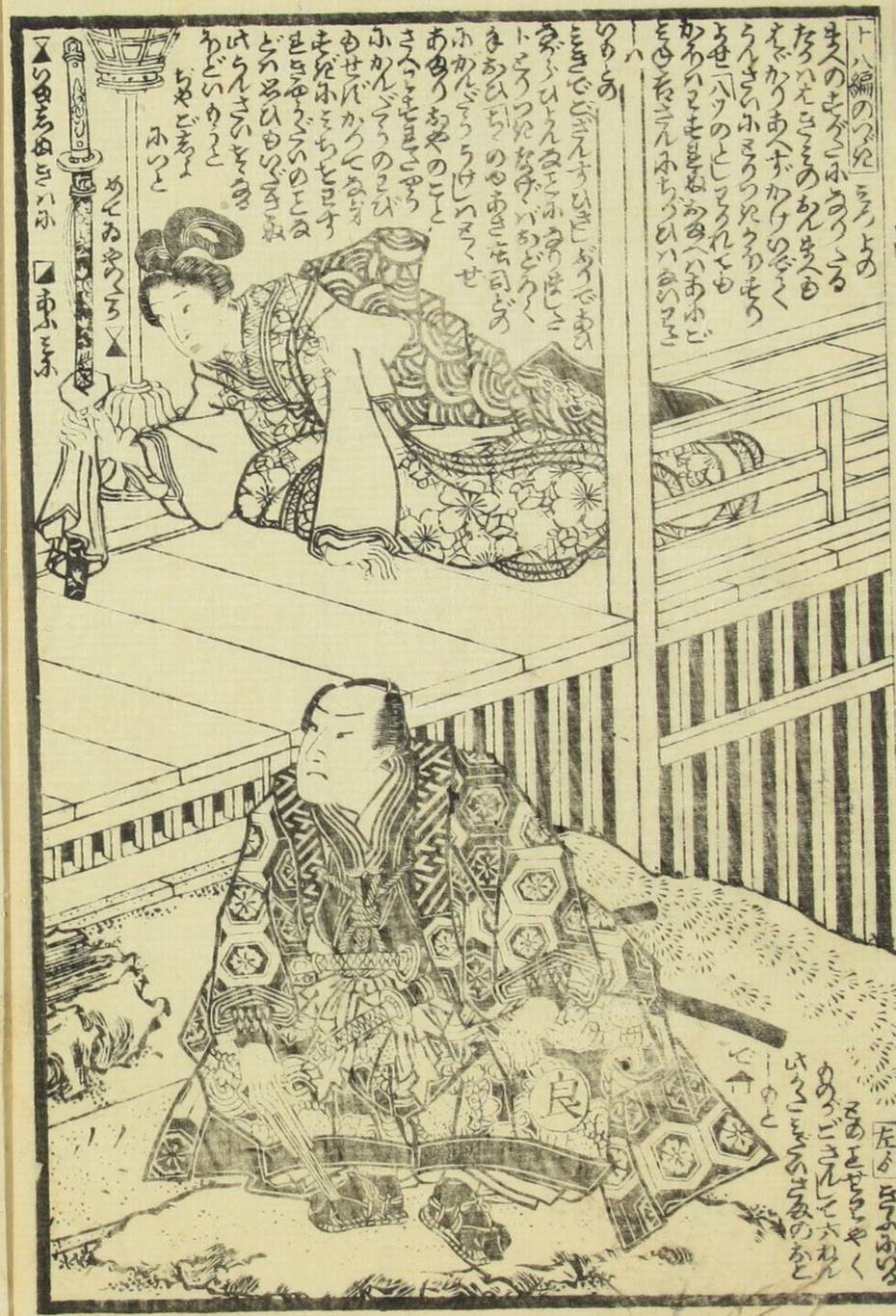
柳亭種彦誌

柏之助
分にそへて
あそあそひつ
みづうつる
さゝらに
えれが

落葉
ちれてきりハ
えふきとわさぞ
岩もん人工
いそつえて
がとせりく
岡えぞちゑひを
云く

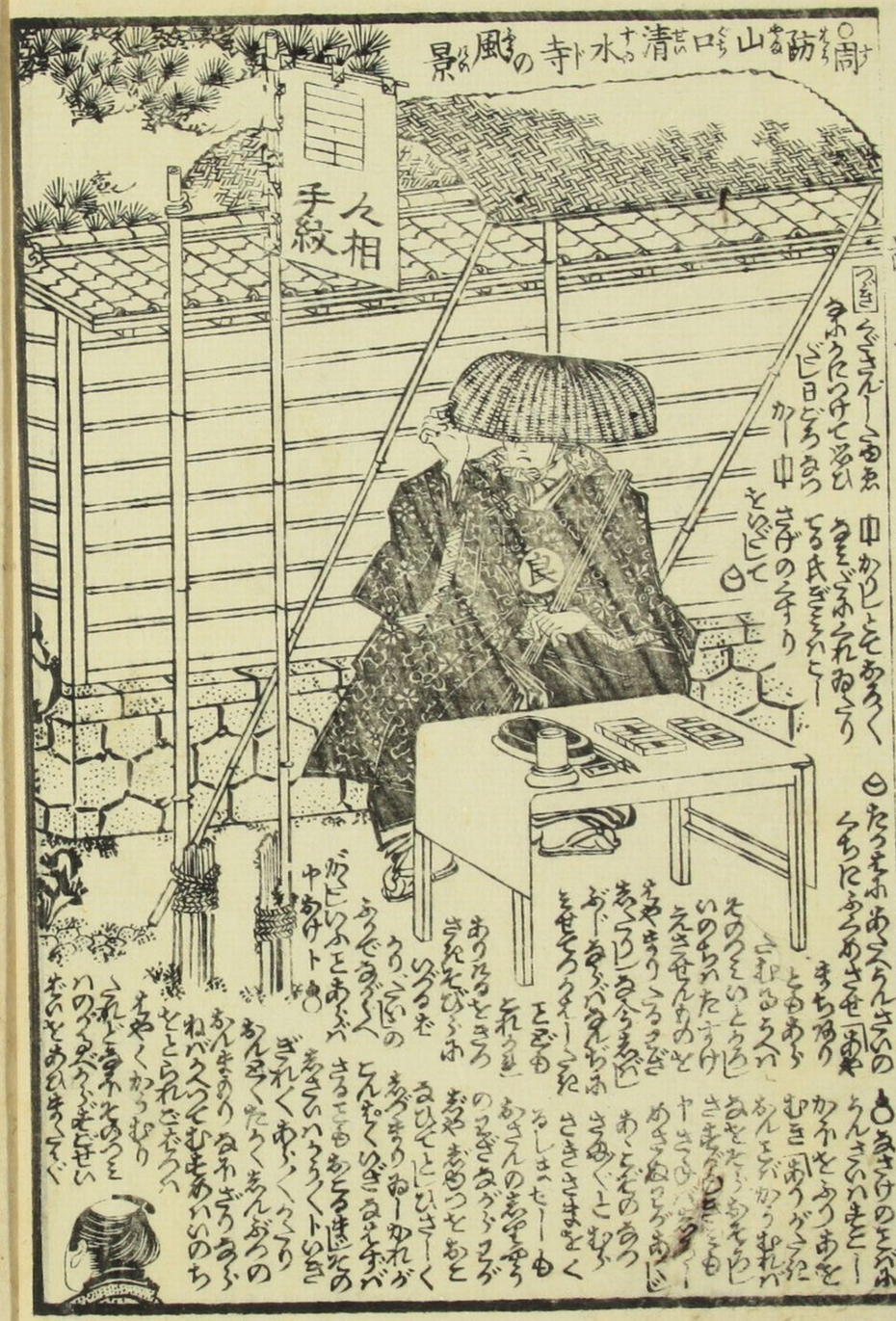
嫡妻
雁音
乳房を含ませハ一本姫
義晴将軍の御臺所
雲井
巫
三男
春王

雲井巫
氏仲


良

輝
手

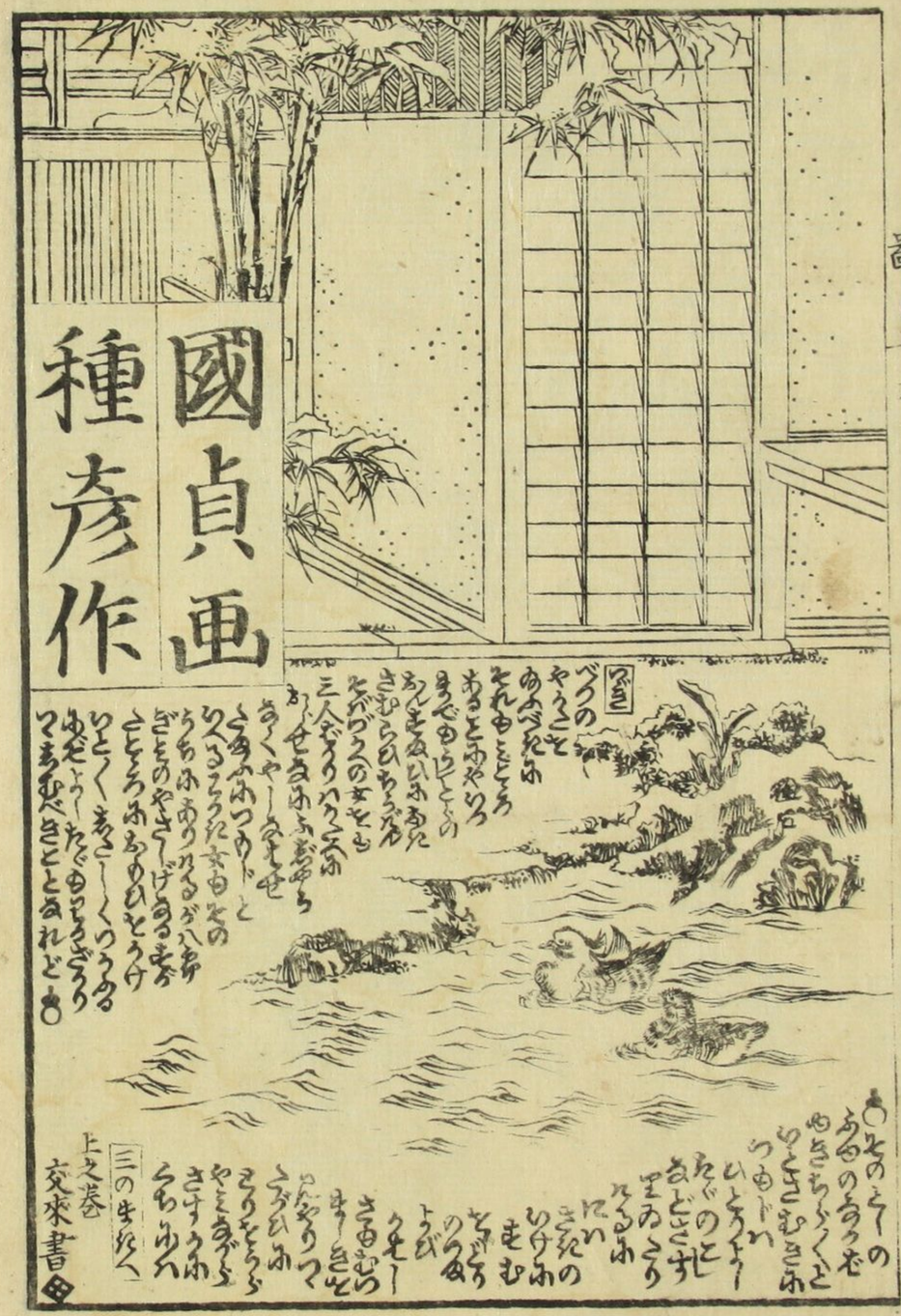
丸


高砂山口清水寺の風景
久相手紋
良

君吉
瀧路太夫
大内の姉ゆて
晴景と
暑と

陶晴景の首級
輝

○先作者義尹と
云人を新ふ作設け
宇治の八の宮ふ
比せんとも



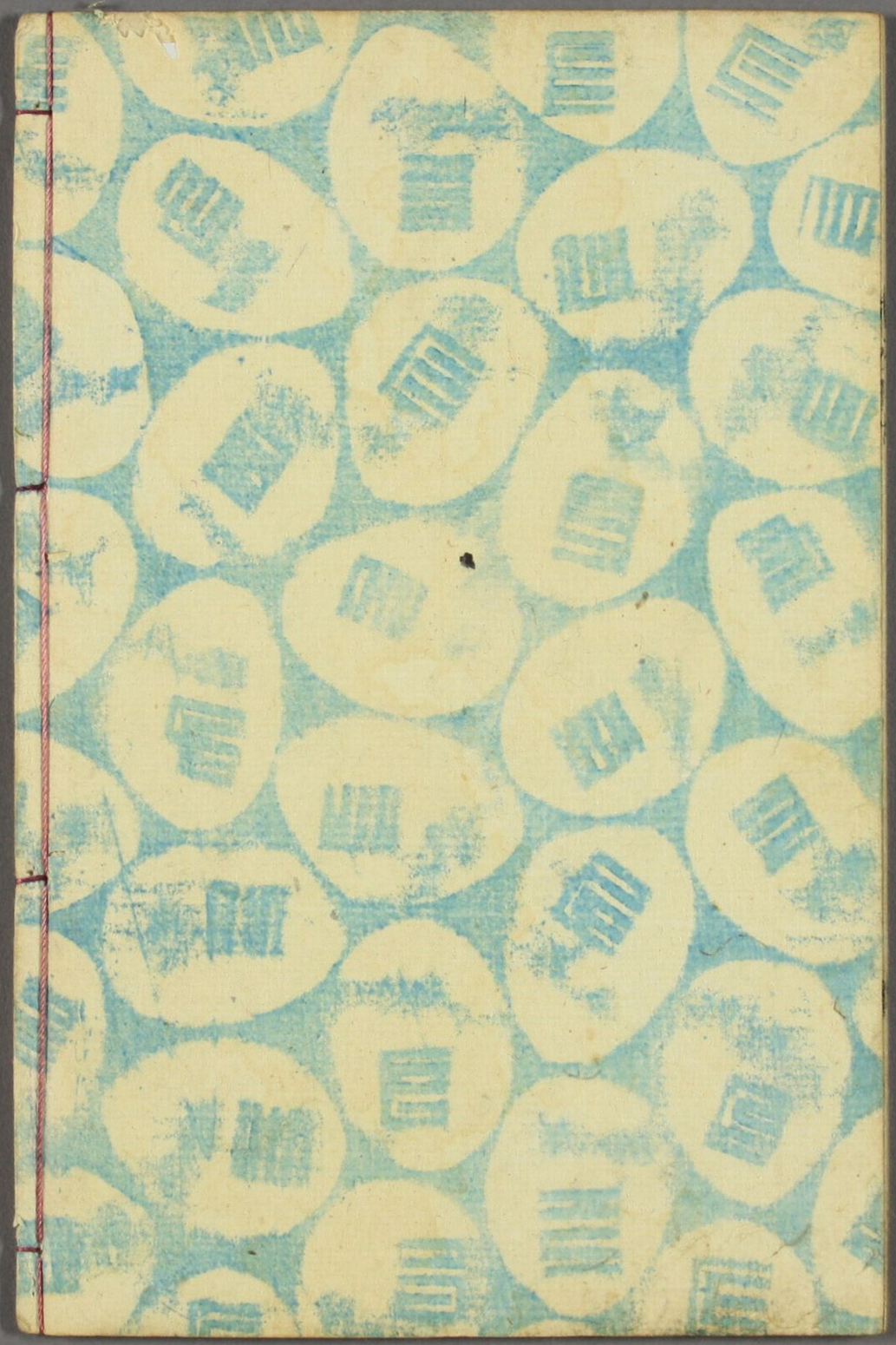
同行道名所記

滑稽富士詣

仙人十辺舎一九作
歌川芳虎画
孟齋芳虎社画

今ハ昔の富士山開闢の御場年ハ當ることなる女人の資山を許されなるとも
帰路の風なれ共同行の老若男女士農工商藝人越客甲州御道より登りみ
ち直走り下山ゆ帰路に東海道に促す途中箱根七箇の温泉場より
信濃大山詣横濱見物巻尋の郭に逗留ゆ東都帰着よ
り記す。巻中毎編雅俗に渉し人情理
歌語ゆ詩哥ゆ俳諧ゆ狂歌ゆ滑稽ゆ
實地みるとり作者の丹精一回ゆ脚色筆談腹をかゝゆるところ
ふりゆ上序文ハ編毎ゆ東都雷名の通客等ゆ狂文ゆ筆と揮ひ一編
編ゆ巻末ハ巻不殘出板仕ゆ同ゆ求ゆる人ハ板元錦昇堂仕舞

地本繪草紙問屋　照降町　笑壽屋庄七梓



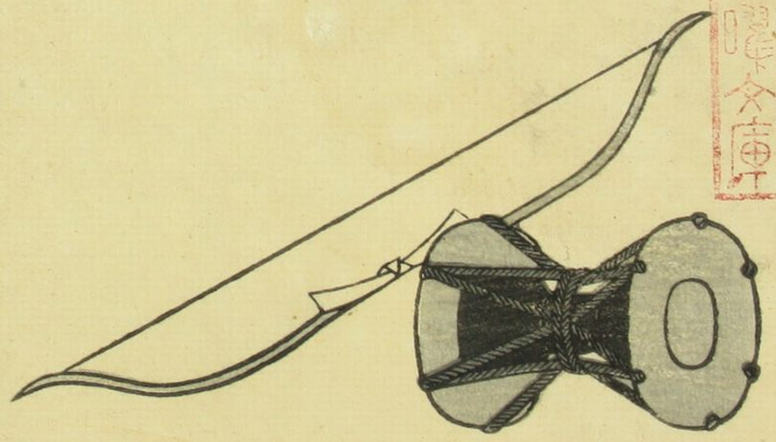
柳亭作
国貞画
十九編下

壬戌春
錦昇堂
新刊

柳亭種彦作

其由縁傍十九編の下

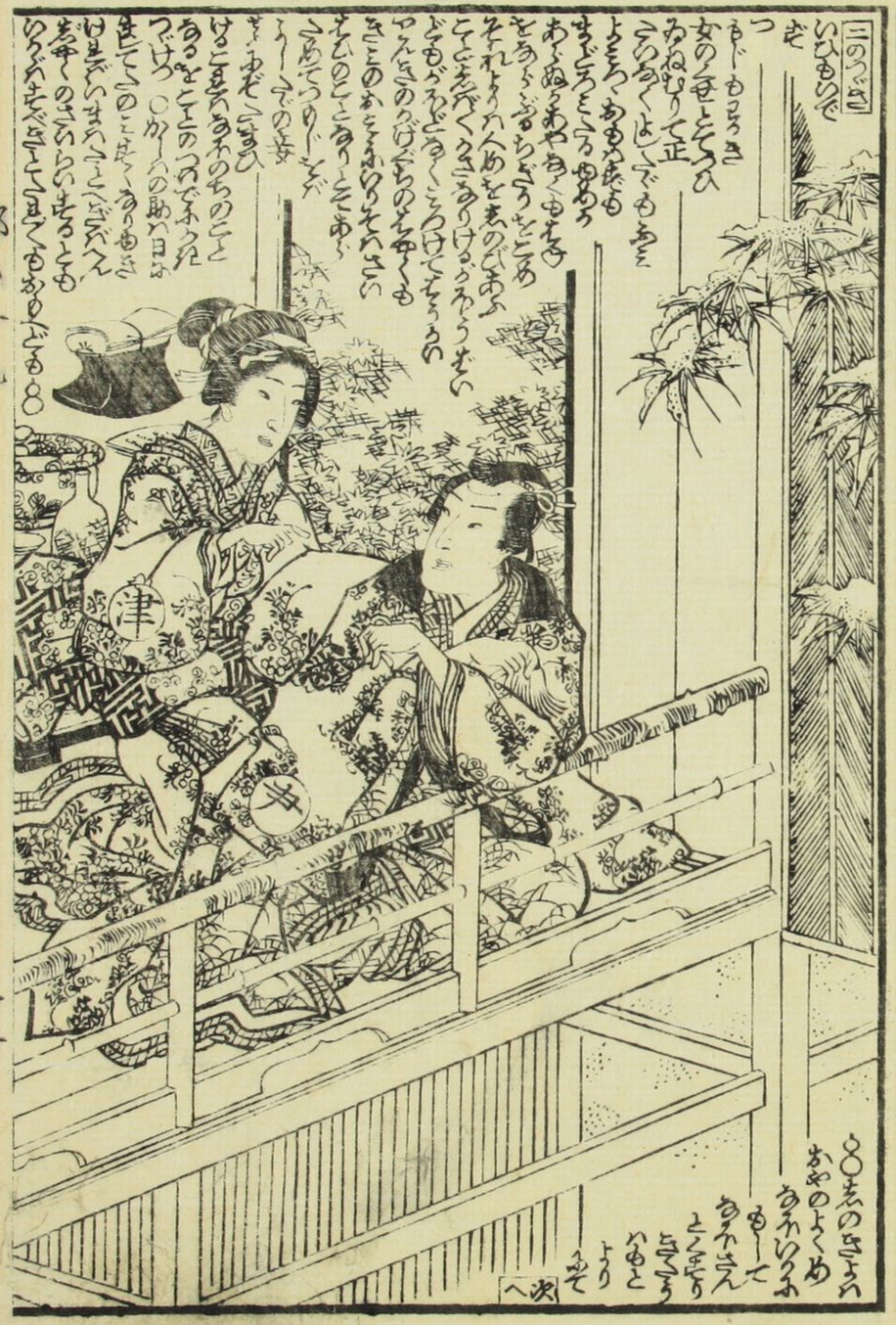
極蝶楼國貞画



三のつゞき

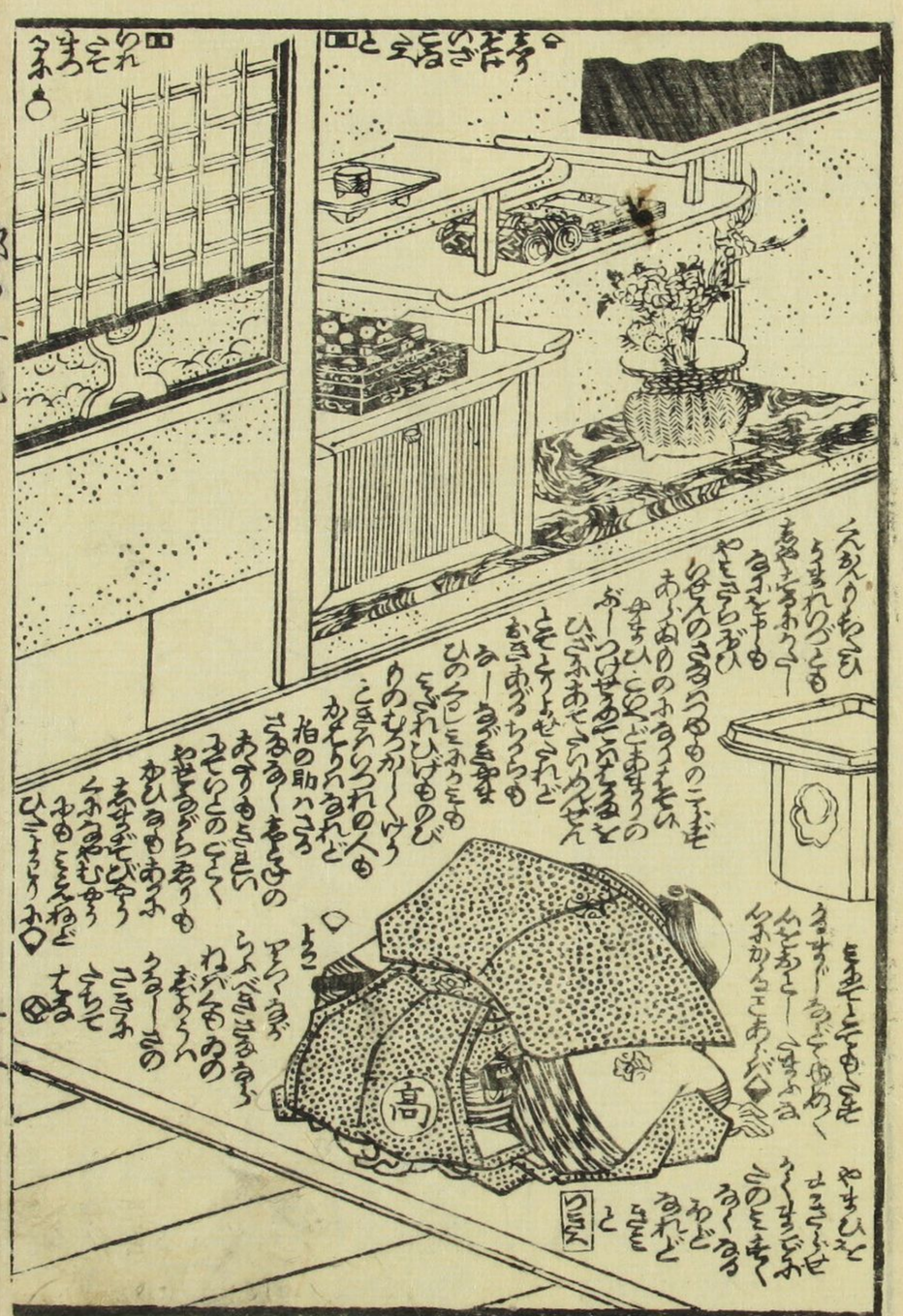
いひもらせ
ぞ

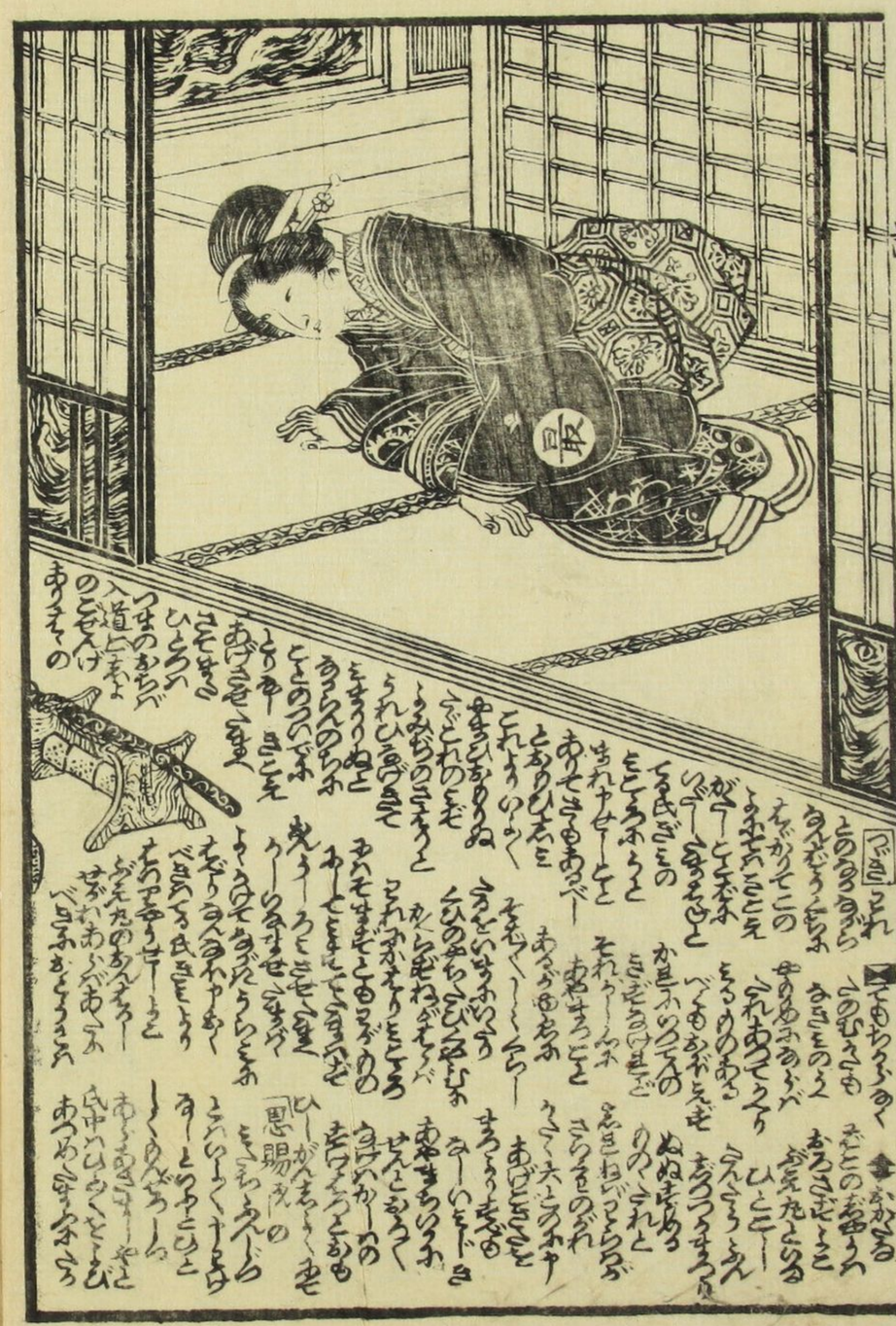
つ
もゞ　もろき
女のこゝろとそろひ
みねばりて正
こゝのゝくよしでもあ
よろこ　あもゝ
まどろこゝろ　ゆめ
あくぬるあやあくもそ
をゝくぶるちくうをとあ
それよりハ人めを忍のびあふ
ことたぐくさまりけるゝうぞい
ぶもがるどもくこゝろけてそうろう
やんきのゝげぐちのそあくも
きこのおそれおりそハさい
ものとこゝりとこゝゆく
こめてつゝりーそゞ
うーこでの女
きゝあぞこゝまし
けることたゝあれのちのこと
あるをこゝとのつゞでふゝ
つゞけつ　○かゝーこの助八日は
生てこのこゝ見てこゝりあさ
ゝは見ゝいまハこゝとゝゞハ
ゝ年ゝのこゝらハ生るとも
いろゞハ生ゝきこゝ見てもあるゝ



ゝ志のきこゝハ
おやのよくめ
あれいろゝふ
もーて
あれこゝん
こゝこゝり
ちゝこゝう
いもと
ゝり
そ

次へ





高

四

梅

氏

輝

稲妻形
怪鼠標
子七編
栗亭西馬稿
魯文作
國明画

其由縁鄙俤 二十編 二十一編 二十二編 種彦作 國貞画

十勇士尼子の礎 五編 魯文作 六編 芳虎画

雨夜鐘四谷雑談 九編 魯文作 十編 芳虎画

比奈乃都大内譚 三編 種彦作 四編 芳虎画

地本問屋 江戸てら町 ちゑすや 庚七

由
歌
柳亭種彦作
川国貞画
笑壽玉梓
十九編
合十